

Q 23－“ドゥルー祭”について教えてください。

A－ イギリスの海藻学者キャスリーン・メアリー・ドゥルー女史 (Cathleen Mary Drew Baker) のノリの糸状体に関する研究業績を記念して、毎年 4 月 14 日に熊本県宇土市の住吉神社境内にある記念碑前で行われます。ドゥルー女史は 1901 年ランカシャーに生まれ、マンチェスター大学を卒業、同大学の講師を 2 年間勤めたのち米国カリフォルニア大学で 2 年間海藻の研究を行い、帰国して母校工学部のベイカー教授と結婚、1939 年には Doctor of Science の学位を受けました。女史は主に紅藻類の発生と細胞学に関するすぐれた論文を多数発表しています。1952 年、英国藻類学会の創立に努力し、初代会長となりました。日本のノリ養殖との関連では、紅藻アマノリ類の糸状体の発見 (1949) が特筆すべきものです。日本のノリ養殖産業は、人工採苗技術が確立されるまでは自然任せの孢子着生に頼っていました。ドゥルー女史によってアマノリ類の一種 *Porphyra umbilicalis* の果孢子が海底の貝殻に潜り込み糸状体 (かつては別種の海藻 *Conchocelis rosea* とされていた) という世代で夏季を過ごすことが発見され、ノリの一生 (生活史) が明らかになりました。女史と親交のあった九州大学の瀬川宗吉教授からこのことを聞いた熊本県水産試験場の太田扶桑男技師は、研究を重ねた末に日本のノリで人工採苗 (貝殻に果孢子を潜らせて室内培養した糸状体から放出される殻孢子をノリ網に着生させる技術) に成功しました。この成功は、瀬川教授を通じてドゥルー女史に伝えられ、日本の海苔漁民のために喜びあったとのこと。瀬川教授は日本のノリの人工採苗を女史に見せたいと思いましたが、女史は 1957 年 9 月に 56 歳の若さで突然亡くなりました。教授は大変悲しみ、「日本の海苔養殖業に大きな進歩をもたらした偉大な業績を記念するために是非女史の記念碑を造りたい」と言っていました。1960 年に瀬川教授も 56 歳で突然逝去されました。ドゥルー女史を恩人と称える海苔漁民は瀬川教授の遺志を受け継ぎ、全国の海苔関係者から浄財を募り、日本一のノリ漁場である有明海が一望できる宇土市住吉町の海岸に面する小高い丘 (住吉神社敷地内) に女史の顕彰碑を建立しました。その除幕式は 1963 年 4 月 14 日に行われ、漁民の行為に感動した女史の夫ライト・ベイカー氏も出席し、女史の学位授与の証であるガウンと帽子を漁民に提供しました。これ以来、海苔関係者は毎年 4 月 14 日を“ドゥルー祭”と称して顕彰を続けています。(主として、ドゥルー女史生誕 100 年記念事業実行委員会, 2001, 「キャスリーン・メアリー・ドゥルー・ベーカー女史」から引用)